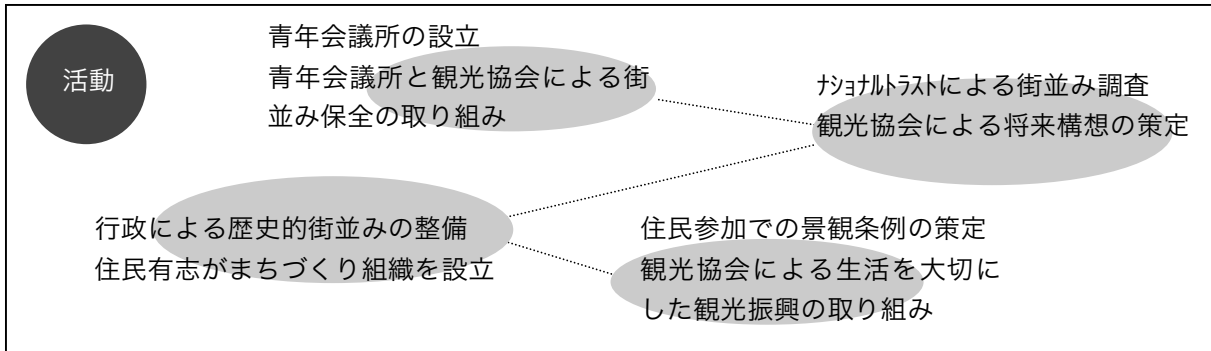
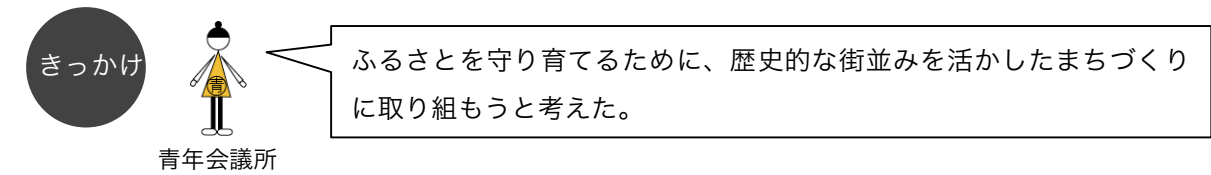
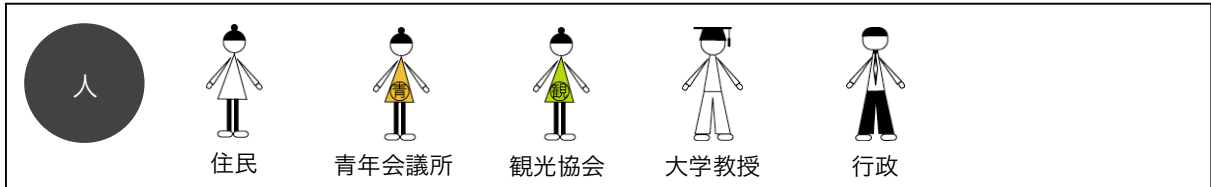




古川町のまちなみは、調和を重んじる慣習と、飛騨の匠の大工によって守られてきました。さらに、観光協会や行政、住民組織の連携によって、歴史的まちなみの整備が進められました。

まちなみが整備され、観光客も増えてきた頃、高層ホテルの計画がございました。これに危機感を感じた住民は、専門家の助けを得ながら、景観条例の策定に取り組みました。

住民の暮らしを大切にしながら、観光との両立を目指したまちづくりが進んでいます。



- 効果**
- 歴史的まちなみの整備が進む
  - 景観条例が策定される
  - 観光客の増加
  - 住民の生活と観光の両立を目指した取り組みが進む

住民	青年会議所・観光協会	大学教授	行政
<ul style="list-style-type: none"> <li>○周辺と調和した住宅建設等による街並み形成</li> <li>○景観条例策定への参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○歴史的街並みを活かしたまちづくりの取り組み</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○街並み調査の実施</li> <li>○住民参加での景観条例策定の支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○青年会議所・観光協会と連携した歴史的街並みの整備</li> <li>○住民参加での景観条例策定</li> </ul>

1972

まちの将来が心配…

まちづくりをなんとかしたい

青年会議所

どうしたらいいか…何か方法は？

外の人に聞いて応援してもらおう！

このまちの魅力は？

ここにはふるさとがあります

手がかりを探すため、古川町を訪れていた俳優のもとを訪ね、古川町の魅力は何が聞きました。

地域の将来を心配した仲間が集まって、青年会議所を設立します。しかし、周りの理解を得られず、なかなか成果が上がっていませんでした。

映画制作に対し、その意義を問う声もありました。しかし、本当の目的は、映画撮影を通じてまちづくりの仲間の中に共通の理念をつくることでした。

共通理念

まちづくりの仲間づくり

映画を作って何になる？

ふるさとに愛と誇りを

ふるさと探しに映画を撮ろう！

ふるさと…何だろう？

みんなが同じ思いに！！

観光協会でもまちづくりだ

観光協会

蔵を修景してみたいです

それいい！

ある作家が著書のなかで、古川を流れる川の風景を褒めたことをきっかけに、酒造会社が蔵の修景を行いました。

これからは街並み保全でいこう！

観光協会では、運営の行き詰まりを打開するため、青年会議所のメンバーを迎え入れます。これにより、青年会議所のまちづくりの理念が観光協会にも反映されるようになりました。

町並み整備もいいものだ

町並み景観デザイン賞

新築の建物を対象として、古川らしい建物を表彰する

それなら賞をつくっちゃえ！

まだ早いよ

景観条例つくろう！

街並み保全

観光協会ではこれに目を付け、街並み保全に取り組むことにします。

町並み調査をお願いします

調査するうちに疑問が…

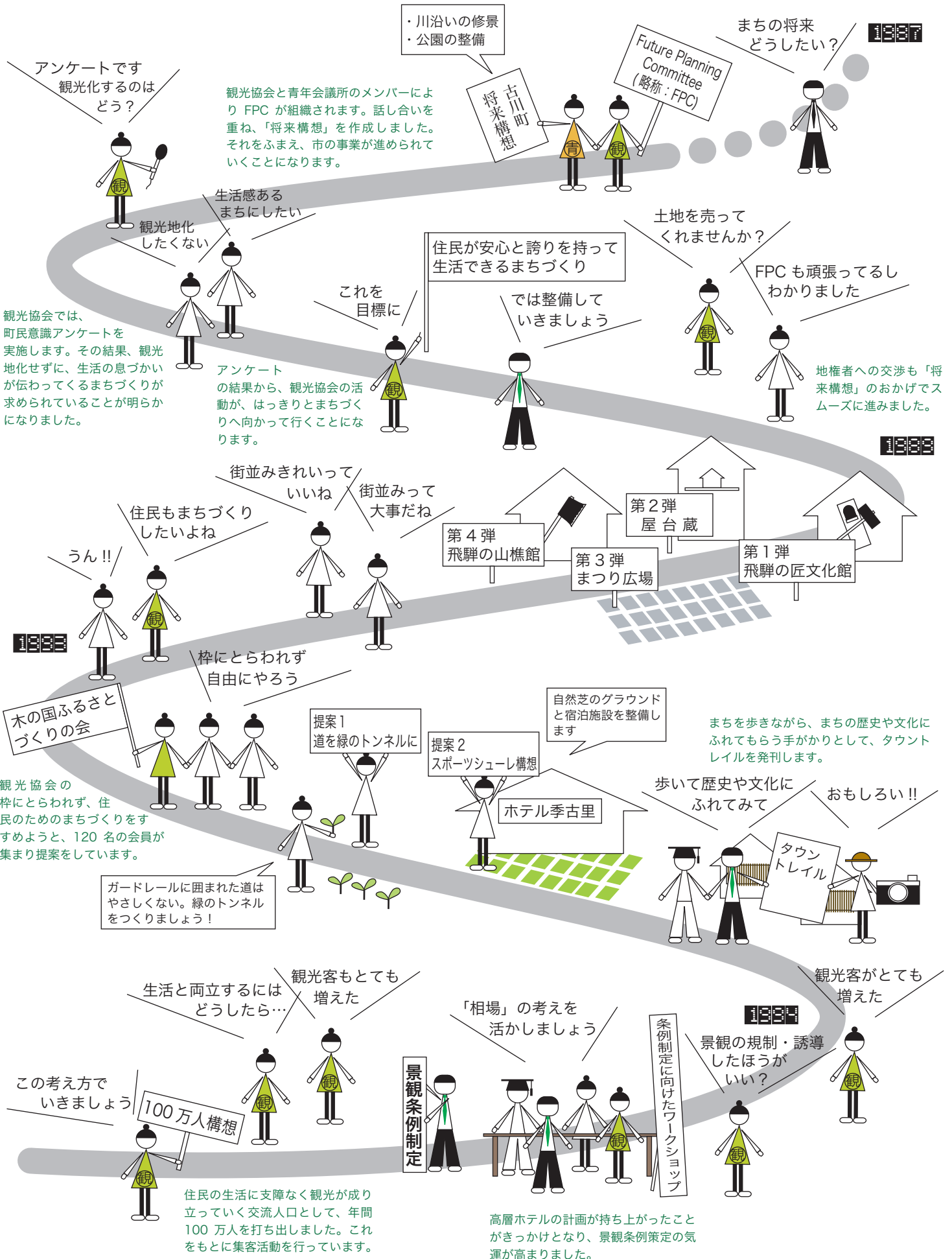
【疑問】補助金があるわけでもないのに、どうして建替えが行われるたびに町並みにあった建物ができるの？

屋台蔵より高い建物はつからないんです

なるほど！

【こたえ】「相場（周囲との調和）」を崩すような町並みにあわない建物をつらないという考え方が昔からあったから

町に残る伝統産業を守っていきたいという思いもあり、大学の先生らの協力を得て、ナショナルトラストによる町並み調査を行うことにしました。



## □景観まちづくりの3原則からみた成功のポイント□

## 原則1《地域性》 歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

## ●地域に伝わるまちづくりの慣習の再発見

- ・古川町には古くから、「相場」という言葉で表される、周囲のまちなみに合わない建物をつくらないという慣習がありました。しかし、徐々に、この言葉は住民の間では死語になりつつありました。そのような中で(財)日本ナショナルトラストによる飛騨古川の町並みまちづくり調査が行われ[昭和61年(1986)]、調和の取れたまちなみが維持・改善され続けている要因として、「相場」という言葉と共に古くからの慣習が再認識されたことで、地域の人々の間でまちなみ景観に対する意識が高まることとなりました。

>>古くから伝わるまちづくりの慣習は、地域の文化や風土に根付いた合理的な考えの中から生まれています。このような慣習を掘り起こしてみると、景観まちづくりの方向性が見えてきます。

## ●地域の中心地区でのまちなみ形成モデルの建設

- ・景観まちづくりに対する関心が高まる中で、「飛騨の匠文化館」[平成元年(1989)]や「飛騨古川まつり会館」[平成4年(1992)]、「まつり広場」[平成4年(1992)]などが建設・整備されていきました。古川町の旧役場があった地域の中心的な場所に、地域の文化を伝える施設が、まちなみ整備の規範となるような意匠の建物によって出来上がったことで、景観まちづくりに対する地域住民の意識がより高められることとなりました。

>>景観まちづくりへの関心を高めるためには、まちなみ形成のモデルとなるような建物を実際に整備し、人々に示すことも有効な方法の一つです。

>>まちの中心エリアなど、まちづくりの骨格となる重要な区域は、特に力を入れて景観整備に取り組むことが大切です。

## 原則2《推進体制》 早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

## ●青年会議所・観光協会の連携による景観まちづくりの取り組み

- ・古川町のまちづくりは、青年会議所の運動から始まりました。地域や商店街の将来を心配した人々によって青年会議所が設立され[昭和47年(1972)]、映画作りの取り組み等を通じて、まちづくりの共通行動理念が確立されていきました。
- ・青年会議所の動きに触発された観光協会[昭和33年(1958)設立]では、各業種の組合から選出される理事に加え、様々な分野から年齢を問わずめばしい人材を登用していき、組織改革に取り組みました。これにより、青年会議所でまちづくりに取り組んでいたメンバーを交えて、観光協会でも景観まちづくりの活動が展開されるようになりました。

>>景観まちづくりを推し進めていくためには、地域の人々の積極的な行動が不可欠です。青年

会議所や観光協会も、重要な役割を担っています。

>>景観まちづくりには、色々なアイデアや工夫が必要です。柔軟な組織運営によって、様々な人々が活躍できる場を用意しましょう。

### ●学術調査によるまちなみの価値の評価とヘリテージセンター建設の提言

- ・観光協会により自主的な景観まちづくりが進む中で、(財)日本ナショナルトラストの調査により [昭和61年 (1986)]、まちなみや建物が学術的に評価され、さらに、ヘリテージセンターの建設が提言されました。これによって、地域の人々のまちなみに対する意識が高まると共に、景観まちづくりの方向性が明確になりました。

>>専門的な調査を行うことで、新たな価値の発見や、景観まちづくりの方向性を見極めに繋がります。また、その際に、まちなみや建物に対する学術的な評価を得ることで、地域の人々の関心が引き起こされます。

### ●観光協会・青年会議所と行政の連携による景観まちづくり

- ・観光協会が自主的な景観まちづくりに取り組んでいく中で、観光協会が様々なアイデアを出し、それを行政が支援し、実現させていくという形が徐々に生まれていきました。昭和63年 (1988) に策定された「古川町将来構想」では、観光協会と青年会議所のメンバーによる勉強会に、行政職員は裏方として参加し、議論を積み重ねながら策定されました。
- ・さらに、行政が、この将来構想を踏まえた事業 (起し太鼓の里整備事業) を立ち上げ、瀬戸川沿いの修景や、まつり広場の整備等を実施しました。観光協会・青年会議所と行政との対話の成果である提案が実現されたことで、両者の信頼関係が深まることとなりました。

>>景観まちづくりでは、官民の一体的な取り組みが不可欠です。議論や対話を積み重ねることが、信頼関係の構築に繋がります。

>>取り組みの成果が実現されることで、関係者のやる気が引き出されます。例え小さな事業であっても、実現に繋げることが次の一步に繋がります。

### ●住民が自由にまちづくりを考える「木の国ふるさとづくりの会」の結成

- ・行政と青年会議所の連携によって景観まちづくりが進んでいく中、住民の間から、組織の枠にとらわれずに、自由にまちづくりに関わりたいという動きが起きました。そして生まれたのが、「木の国ふるさとづくりの会」です [平成5年 (1993)]。約120人の会員が、複数の部会に分かれて活動を進め、その成果を『まちづくり提言書』として提案しました。この中から、「人に優しい道」や、スポーツシュレ構想、道の駅などが実現されました。「木の国ふるさとづくりの会」は、町村合併 [平成16年 (2004)] により発展的解散しました。

>>様々な活動を展開し、より良い方向性を模索していくためには、住民の視点も大切です。まちづくりに関心のある住民の活躍の場を用意することで、様々なアイデアや活動が生まれてきます。

### ●住民による景観条例の策定と専門家による支援

- ・観光客の増加や、それに伴う高層ホテルの計画に危機感を感じた住民は、景観条例の策定に取り組みました。具体的な内容の検討においては、まちづくりの慣習を手がかりに、これを数値化したり、

モデルケースを提示したりながら検討を進め、「飛騨古川ふるさと景観条例」が策定されました〔平成8年（1996）〕。この策定に、（財）日本ナショナルトラストによる飛騨古川の町並みまちづくり調査の際に、実際に調査にあたった西村幸夫東京大学教授の協力を得ながら、ワークショップ形式で検討を進めました。

>>地域の慣習を尊重することが、無理のない景観計画や景観条例等の策定に繋がります。また、地域のことをよく知る専門家の協力・支援を得ることも有効な方法の一つです。

### 原則3《実現性》 計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

#### ●青年会議所による、映画作りを通じたまちづくり理念の確立

- ・まちの将来を心配する人々により組織された青年会議所でしたが、活動当初は、なかなか成果が得られず、地域からの理解も得られませんでした。そこで取り組んだのがふるさと探しの映画作りでした。この映画は、見せることに主眼が置かれたものではなく、撮影を通じた仲間作りを目的としたものでした。その目論見通り、議論を重ねながら撮影に取り組んだことで、青年会議所のメンバーの間で、その後の活動のベースとなる共通理念が生まれることとなりました。

>>景観まちづくりの取り組みに向けては、目標や考え方を共有することが重要です。一緒に活動に取り組んでみることも、共通の理念の確立には有効です。

#### ●観光協会による景観デザイン賞の創設

- ・景観まちづくりへの取り組みを開始した観光協会は、行政に対して景観条例の制定を申し入れるものの、時期尚早という判断により実現しませんでした。そこで、自ら「古川町景観デザイン賞」を創設し〔昭和61年（1986）〕、新築等の建造物を対象に、在来工法の飛騨古川らしい建物を表彰することを通じて、景観整備への住民の参加を促していきました。受賞者には記念品と建物に飾るプレートが贈呈されるという、賞としては決して豪華とはいえないものでしたが、住民の間で、この賞を意識した古川町らしい建物の建設が進みました。

>>まちなみに調和する建物等を積極的に表彰することにより、景観まちづくりに取り組む人を勇気づけることに繋がります。また、表彰制度を創設し、審査基準等を公表すること自体も、まちなみに対する意識を高めることに繋がります。

#### ●補助事業を活用した施設建設とまちなみ整備

- ・施設建設やまちなみ整備は、補助制度等を活用して行われました。観光協会及び青年会議所によって策定された将来構想を元に行われた「起し太鼓の里整備事業」では〔平成元年（1989）から平成4年（1992）〕、自治省（当時）の「ふるさとづくり特別事業」を活用し、瀬戸川沿いの修景やまつり広場の整備等が実施されました。また、「飛騨の匠文化館」の建設は、ナショナルトラストによって行われました。

>>補助制度を活用することにより、少ない負担で景観まちづくりが進みやすくなります。補助制度への過度の依存を避けながら、目的に合った制度を活用することが大切です。

### ●まち歩きのためのタウントレイルの発刊

- ・住民や、まちを訪れる観光客に、まちなみへの関心を持ってもらうことを目的に、『飛騨古川タウントレイル』[平成5年(1993)]及び『飛騨古川タウントレイル2』[平成18年(2006)]が作成されました。古川町の歴史・文化や、伝統的な木組みの技術など、通常の観光ガイドには載っていないような専門的な内容が、イラスト等を交えて平易に解説されており、まちなみ散策を楽しみながら学べる内容になっています。

>>地域の歴史や文化、まちなみの特徴などを、市民や観光客に分かりやすく伝えていくことが、景観まちづくりの進展には大切です。タウントレイルなどの読みやすい書籍は、有効なツールの一つです。また、タウントレイルなどの作成は、地域を見直し、新たな資産等の発見のきっかけにもなります。

### ●まちなみの規制・誘導を目指した景観条例の制定

- ・条例の制定により、建物の建設に際して、まちなみに調和したデザインへの誘導と、住民による景観審議が可能となりました。

>>景観の維持・改善は、住民の自主的な努力によって進められることが理想ですが、よりよいまちなみへ誘導していく上で、必要に応じて景観法を活用したり景観条例を策定したりすることも有効な方法です。

### ●暮らしと観光の両立を目指した「100万人構想」の提言

- ・まち並みの整備が進み、観光協会により観光振興が図られる中で、観光客が徐々に増加していきました。このような中で、観光協会は、住民の生活を阻害することなく観光関連業者が成り立つために、年間100万人という交流人口数の目標を提言しました。これを受けて、行政では集客活動に力を入れると同時に、観光化しすぎない、住民の生活が感じられるまちづくりが進められることとなりました。

>>地域の活性化にとって、観光も重要な産業です。しかし、観光地化しすぎると、住民の生活が阻害されるだけでなく、まちの魅力が失われることにもなりかねません。持続的な観光に向けて、生活と観光のバランスへの配慮は欠かせません。